

第八回むかしのくらし展 「今日は何を着よう？く着るものいまむかし」

藍野 かおり

当館では毎年、小学三・四年生社会科の単元に対応した「むかしのくらし展」を開催しています。これは、館蔵資料を中心に毎年異なるテーマを設定し、昔の生活道具を紹介するものです。

また、時代が進み、女性はカツギの替わりに衿に晒を巻き、白手拭をかぶるようになり、カツギと白袴は別の役割を果たすものですが、簡略化の過程で一つの形式に省略されていったと思われ

ませんでした。着物から洋服への移行の過程では、これまでの着物の仕立て方を活かし、洋服の要素を持つ改良衣が考案されました。また、着物を着る時間を短縮するため、名古屋帯や二部式の作り帯などの簡便帯が考案されたのもこの運動の一環でした。改良衣はそれほど普及しなかったようですが、簡便帯は多くの女性に受け入れられました。

本展は明治時代から昭和三十年代を対象にしています。着るものの変化と合わせて、その背景にあるそれぞれの時代の考え方についても思いを巡らせていただきたいと思います。また、本展をご覧いただき、着ていたものの記憶を呼び起こし、家族や仲間と思い出を語り合っただけであれば幸いです。ぜひ、ご家族みなさんでご覧いただければと思います。皆さんのご来館をお待ちしています。

【葬式と衣】

現代では葬式に参列する誰もが黒の喪服を着用します。しかし、かつては近親者と一般参列者の服装に明確な区別があり、皆が黒い服を着た訳ではありませんでした。

近所の人や仲間などは普段の着物に羽織を着用しました。死者の親兄弟など、血縁の濃い人のことを新潟ではミニツイタ（身に付いた）人といい、他の人とは違う服装でした。一般的に、ミニツイタ男性は白無垢、あるいは黒紋付に白袴を身につけます。女性は、白無垢、あるいは、江戸袷や黒紋付を着て白手拭をかぶり、葬列に野辺送りではカツギをかぶり、葬列に加わりました。

【洋装の基礎を作った大正期】

明治時代になり、軍服や制服が制定され、男性の洋服着用が進みます。一方で女性の洋服着用は欧米文化を享受した一部の上流階級に過ぎませんでした。

大正期になると生活改善同盟会の生活改善運動によって、女性や子どもにも洋服着用を推進する動きが現れます。この運動では、洋服の利点として、着物に比べ必要な布の量が少なく、済むので経済的であることや、体にフィットして動きやすいこと、着脱が着物より簡単であることが強調されました。さらにもこの場合は、洋服は帯で体を締め付けなくて済むことや、運動をする時に動きやすいことから、成長を妨げず健全な子どもを育てることができるとされました。

大正期から昭和初期にかけて、成人女性の洋装化はなかなか進展しませんでした。が、子どもの洋装化は進み、それを支える母親たちも洋装の知識を持ち始めていました。誰もが洋服を着るようになるのは終戦後のことですが、その基礎は大正末期から昭和戦前期にかけての取り組みにあったと言えるのではないかと思います。

一方、技術面から洋服文化を支える下地づくりも行われます。高等女学校では裁縫の授業に洋裁が導入されました。女学生は、ミシンの使い方やシャツの縫い方を学びます。また、大正末期には、新潟高等女学校の学生の服装が長着に海老色の袴から洋装の制服に変わりました。制服も女学生が授業の一環として自ら仕立てるものでした。また、婦人向け雑誌では子供服や婦人服の仕立て方を紹介したり、型紙が付録に付いたり、洋服を仕立てる方法が記事になっていました。

また、ミニツイタ人は、白袴や白無垢のかわりであったり、白袴に付け加えるという形で、黒紋付の衿に晒をつけたり、白手拭を首に巻くということもありました。このように白のものを身に付けることを「イロを着る」といい、身に付けられた手拭も「イロ」と称しました。

明治時代になり、軍服や制服が制定され、男性の洋服着用が進みます。一方で女性の洋服着用は欧米文化を享受した一部の上流階級に過ぎませんでした。大正期になると生活改善同盟会の生活改善運動によって、女性や子どもにも洋服着用を推進する動きが現れます。この運動では、洋服の利点として、着物に比べ必要な布の量が少なく、済むので経済的であることや、体にフィットして動きやすいこと、着脱が着物より簡単であることが強調されました。さらにもこの場合は、洋服は帯で体を締め付けなくて済むことや、運動をする時に動きやすいことから、成長を妨げず健全な子どもを育てることができるとされました。

大正期から昭和初期にかけて、成人女性の洋装化はなかなか進展しませんでした。が、子どもの洋装化は進み、それを支える母親たちも洋装の知識を持ち始めていました。誰もが洋服を着るようになるのは終戦後のことですが、その基礎は大正末期から昭和戦前期にかけての取り組みにあったと言えるのではないかと思います。



常設展示室から 近代的港湾都市への変貌

常設展示「新潟築港と都市化」のコーナーに、壁面に2枚の沼垂・山の下地区の地図が展示してあります。一つは大正3(1914)年、新潟市と沼垂町が合併した時のものです。信濃川には長大な2代目萬代橋が架かっていますが、新潟駅のある流作場や山の下にはほとんど開発の様子が記されていません。もう一方は昭和5(1930)年のものです。前年の架け替えで短くなった3代目萬代橋、県営埠頭や臨港埠頭、さらに工業地帯が整備された様子がわかります。この約15年の間に何が起ったのでしょうか。



広がる工場地帯
(常設展示室映像「近代的港湾都市への変貌」より)

その変化は「近代的港湾都市への変貌」のモニターに映してもらえばわかります。「地形の変化」のページでは、萬代橋から河口までの信濃川流域の変化を大正と昭和の地形を重ね合わせて比較しています。そして、かつて牧場だった信濃川河口付近の変貌、近代的な埠頭の登場、変わる萬代橋と信濃川の埋め立てを解説しています。一方「広がる工業地帯」のページでは、信濃川の両岸に明治期から昭和初期に作られた県営埠頭や臨港埠頭などの港湾施設や、日本石油や新潟鉄工所などの工場の設置や概要を解説しました。これらは、現代の新潟港の歴史を語る上で大変重要な要素なのです。

明治期、開港場となった新潟でしたが、信濃川の河口の浅い港であったため外国の大型貨物船は入港できず、貿易港としては不振を極めます。それゆえ埠頭のある近代港湾の「築港」は新潟市の悲願でした。明治41(1908)年、越後平野の洪水対策として大河津分水が着工されます。分水の完成によって河口に流れる信濃川の水量制御が可能となる見通しができました。これをきっかけに新潟市と沼垂町は合併し、新潟築港が実現することになりました。大正15(1926)年、倉庫や鉄道を備えた県営埠頭が完成し、これらを中心に新潟市は近代的な港湾都市へと姿を変えていくのです。



展示コーナー

長谷川 伸(はせがわ しん 学芸員)

おすすめの1冊

文化財アーカイブの現場 ―前夜と現在、そのゆくえ

本書のタイトルにある文化財アーカイブとは、文化財の記録を作成することです。近年は、デジタルで記録する「デジタルアーカイブ」が、貴重な資料を人々により身近なものとし、また後世へ伝えていくためのひとつの方法として発展してきています。記録された情報を用いて、普段気軽に接することのできない文化財を復元し、教育普及の場面で活用されることもあります。また細部まで観賞できるコンテンツとして活用する博物館が増えてきたりと、一般の人にとっても身近なものになりつつあります。本書では、様々な文化財のデジタルアーカイブに携わってきた著者が、その経験を活かし、実例を紹介して文化財アーカイブの意義や必要性について語っています。

文化財のデジタルアーカイブには、コストや著作権など検討すべき問題も内在していますが、新潟市の貴重な資料を所蔵している当館にとっても、それらの資料の情報を「アーカイブ」し、皆さまに身近に感じただけのように公開していくことは重要な課題です。本書は、今後さらに発展していくであろう「文化財アーカイブ」について考えるにあたり、その入門編となる一冊です。



福森大二郎
勉誠出版
2010年4月

(並木晴香 学芸員)